



《視聴者が悪に魅了される理由／キックアス／日本とアメリカで決定的に違うヒーロー／ロックバンドは正義か悪か／》

本文抜文

【「覚悟のないくせにヒーロー面するな」と言われたヒーロー活動をしていた女性がいた。彼女のメンタリティこそがロックバンドの本質だと思う。真っ当に正義を行使するならレスキュー隊でも介護職でもしているはずだ。世界を変革させるため悪を行使するならオウム真理教やテロリストのようにテロ活動に勤しむはずである。ロックバンドはそのどちらにも振り切らない。振り切るなら音楽という選択肢はないからだ。ではロックバンドはなんなのか】

語って欲しいバンドを語ってくれない音楽雑誌やライターに我々、は反旗をひるがえそう！

これは、神聖かまってちゃん評である。そ、ニートの。。。

音楽の文脈を知っている音楽ライターが書かないから、

20代のks底辺が違った角度から「神聖かまってちゃん」評を紹介します。

今回は、サムライフラメンコと正義・悪を軸に、神聖かまってちゃんについて語っていきます。

神聖かまってちゃんとサムライフラメンコ ～ロックを趣向する者のメンタルは？正義か悪か

神聖かまってちゃんとサムライフラメンコ

ロックを志向する者のメンタルは？

正義か悪か、それとも——

「本気で死ぬ気もないくせに
軽々しく口にしないで欲しいね」

(サムライフラメンコ10話 : キングトージャー)

『サムライフラメンコ』というヒーローアニメの悪党のセリフだ。

二〇一三年に放送されたアニメである。

内容をざっと紹介しておこう。主人公の「羽佐間正義」はファッションモデルで働くかたわら、夜はマスクで顔を隠して町を巡回し、必要とあれば正義の味方「サムライフラメンコ」を名乗り、様々なトラブルを解決しようと奮闘する。彼に出会ってしまい、以後さまざまなトラブルに巻き込まれてしまう警察官「後藤英徳」の二人を中心に「正義の味方」として活動する困難さや意義を描く。



この物語、何に似ているかといえば二〇一〇年に公開されアメリカ映画『キックアス』である。

↓

この物語、何に似ているかといえば二〇一〇年に公開されたアメリカ映画『キックアス』である。あの有吉弘行はキックアスのヒットガール大暴れのシーンだけ見て仕事に出かける毎日と発言していた。

『キックアス』も筋は似ている。

アメリカン・コミックのヒーローに憧れる「ギーク」は誰もヒーローになろうとしない事に疑問をもっていた。彼は本物のヒーローになろうと思い立ち、ネットで買ったスーツを着てヒーロー活動を開始する。↓



お互い似た構図であるが、日本とアメリカで決定的に違うと感じるところがあった。『キックアス』では、マスクに身を包んだ「ギーク」はチンピラとの戦いで、胸をナイフで刺されてしまい、一瞬で倒れる。「現実はこうだろ？」とお約束を期待している観客をあざ笑うような演出だ。

アメリカではチンピラレベルでも対峙すると死というリスクが発生することを意味している。どんなに身体的・地位が上回っている相手だろうと、自分にとって悪があれば簡単に暴力でそれを排除することが可能ということだ。つまり、ナイフと銃を使えば正義（悪）を簡単に行使できる怖さを表している。

「ギーク」はケガの後遺症で痛覚がマヒしてしまう。↓

「ギーク」はケガの後遺症で痛覚がマヒしてしまう。その代わりに常人よりタフになった。

一方、サムライフラメンコは常人だった。

やれることといえば、路上喫煙や信号無視、夜中のごみ出し、傘の持ち去りなどの注意喚起であった。

警察官の「後藤英徳」が視聴者目線でサムライフラメンコのヒーローごっこにツッコミを入れていく。

コミカルさをもって物語は展開していく。

TVのヒーロ物に憧れている「羽佐間正義」は巨大な悪と戦いたいと思っていた。しかし、悪の秘密結社やアメリカのようなスケールの大きい悪がないことも彼は理解していた。日本は平和だった。

後半、物語はシリアスになっていく。↓

後半、物語はシリアスになっていく。死人が出てしまうのだ。本当に悪の秘密結社が東京に現れて、日本を制服しようとしていた。

『サムライラメンコ』の世界は今わたしたち視聴者が生きる世界線だということが視聴者には理解されていた。警察官の後藤が羽佐間のヒーローごっこにするツッコミがあったからだ。その視聴者目線によって『サムライラメンコ』の世界が虚構（アニメ）なのではなくて、「サムライラメンコ」の個だけが世界の中で虚構として孤立しているということが表されていた。

彼は本物の殺戮集団と戦うことになる。↓

彼は本物の殺戮集団と戦うことになる。

彼に触発されてヒーロー活動をしていた女性がいた。彼女は本物の悪を目の前にして自身の動機の弱さを突きつけられる場面がある。彼女の友人が悪のボスに爪を剥がされる拷問を受けている光景をみて、彼女は「やるなら私をやれ」と叫ぶ。しかし、ヒーロー番組の常套句を使っただけで、実は自分の命が一番惜しい彼女の本心を悪のボスは言い当ててしまう。↓



「本気で死ぬ気もないのに
軽々しく口にしないで欲しいね」

ヒーロー活動を行っていたその女性に対して悪のボスの言葉である。
彼女は臆病だったのだ。↓

「こんな世界ぶっこわしてやる」と意気込む筆頭のロックバンドが「神聖かまってちゃん」だ

。怒髪天の増子がある雑誌のインタビューで「本来ロックはテロ、嫌がらせなんだよ」と言っていた。秩序を乱すことが悪という前提に立つならば、神聖かまってちゃんは悪の側である。

『死ねよ佐藤』という曲では「死ね」という言葉を連呼するからだ。しかし、聴いていてこんなに気持ち良いことはなかった。そう、悪は気持ち良い。『機動戦士ガンダム』の原案である富野由悠季は作品を製作するとき、物語の構造上、悪は正義に倒されるからこそ自分の自意識を悪に詰め込むことができるという主旨のことを言っている。

視聴者が悪に魅了される理由はそこにある。自分の欲求に正直にいるところにわたしたちは惹かれるのではないだろうか。



正義はさしずめ、エグザイル、西野カナ、ジャニーズ、アイドルといったところか。↓

正義はさしずめ、エグザイル、西野カナ、ジャニーズ、アイドルといったところか。

それはマスコミと大衆を眺めていれば分かる。正論しかないからだ。そんな世界に「死ねええええ！」という「の子(神聖かまってちゃんのボーカル)」の絶叫は嫌悪されるだろうと思う。レギュラーな世界にイレギュラーなものが割って入ろうとすると大衆は嫌がる。



安丸良夫という学者が百姓一揆について研究している。↓

安丸良夫という学者が百姓一揆について研究している。興味深いことを述べていた。百姓一揆は、身分制度を廃止や武士や商人より貧しいから地位を入れ替えろと言っているのではなく、むしろ増税や凶作のようなイレギュラーな事態で庶民の生活が悪化したときに、そんなに年貢を取られたら今のように生活できないから「現状を維持」してくれという意志だったという。

日本は昔からイレギュラーなものを受け入れない気質があるということだ。しかし、郷に入れば郷に従えという言葉もあるように、中に一旦入り込んでしまえば受け入れられる。目の前にあるものが正義か悪かは関係なく、イレギュラーなものは悪であるという感覚が日本人にはあるということだろう。

なら、ロックバンドは大衆に認められたら正義、そうでなければ永遠に世間の嫌がらせでしかないのか。もっと別の価値観があるはずだ。↓

なら、ロックバンドは大衆に認められたら正義、そうでなければ永遠に世間の嫌がらせでしかないのか。もっと別の価値観があるはずだ。

宮崎駿の引退作と言われている二〇一三年に公開された映画『風立ちぬ』にこんな話がある。劇中、ピラミッドのある残酷な世界とピラミッドのない世界のどちらをキミは選ぶのか？と主人公は問われるシーン。主人公の「次郎」はピラミッドのある世界を選ぶ。次郎は自身の作っている戦闘機が戦争の道具になることを分かっているが、戦闘機の開発が楽しくてしょうがないからだ。というか、それしか興味が無いのだ。

ピラミッドのある世界でしか美しさを追求できないから「次郎」はそういう選択をする。それは、大衆やモラルや道徳が悪を否定しても、そういったものこそ絶対的な美しさを作り出せるということを表している。正義と悪の概念に関係なく、美しいものは美しいのだ。↓

ロックバンドは正義か悪かに戻ろう。とりあえず正義ではないだろう（ヌルいバンドは置いて）。悪だという語りをしてきたが、実はそれも違うと思う。先に書いた、『サムライフラメンコ』の劇中で、悪のボスに「覚悟のなくせにヒーロー面するな」と言われたヒーロー活動をしていた女性がいた。彼女のメンタリティこそがロックバンドの本質だと思う。真つ事に正義を行使するならレスキュー隊でも介護職でもしているはずだ。世界を変革させるため悪を行使するならオウム真理教やテロリストのようにテロ活動に勤しむはずである。

ロックバンドはそのどちらにも振り切らない。↓

ロックバンドはそのどちらにも振り切らない。

振り切るなら音楽という選択肢はないからだ。普通の人間になるのは嫌だ、でも正義のヒーローにも悪のボスにも振り切れない、そんな臆病な人がロックを聴くしロックバンドを思う。正義に憧れていながら悪に惹かれてもいる特異集団なのだ。↓

でも最近のバンドを見ていると、どのバンドも強そう。なんだかんだいって強そう。そして格好いい。世の中に順応できないという形をとってそれで順応しているように見える。しかし、世の中には、順応できないという形さえ取れずに息ができないでいる臆病がいる。

それを救っているのが神聖かまってちゃんだ。

臆病者は力に憧れる。しかし、臆病だから実行できない。でも実行したい。神聖かまってちゃんの「の子」はその臆病者と同じ位置からそこに向けた音楽を鳴らす。↓

神聖かまってちゃんの「の子」はその臆病者と同じ位置からそこに向けた音楽を鳴らす。

人間は綺麗なものじゃない。それに目を向けていないのが正義側に君臨している歌手たちとそれを疑い無く聴いている者たちだ。わたしたちはどうしてもそこに目がいつてしまう。だから神聖かまってちゃんが声を上げる。↓

悪のボスが言った。「本気で死ぬ気もないのに軽々しく口にしないで欲しいね」という言葉。覚悟がなければ軽々しく口に出来ない言葉を、《自分は本当は覚悟なんかないが言うぞ》ということを知覚して言い放つのが神聖かまってちゃんだ。臆病な人間が口にできない事を「の子」は叫ぶ。

それがあからわたしたちは生きやすくなる。←

うおお

<http://p.booklog.jp/book/82873>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ